

STAGE 3 目標の達成状況の把握・指導の改善

POINT



「振り返り」を次の授業づくり生かす

(1) 達成状況の見取り

CAN-DO リストの形での学習到達目標を設定し、言語活動を工夫し、実施した後は、生徒が「どれぐらいできるようになったのか」を適切に把握することが必要不可欠です。その把握のために方法については、CAN-DO リストを設定した時に、あらかじめ想定しておくことが望ましいと言えます。

<各技能の評価方法の例>

聞く	話す	読む	書く
・リスニングテスト ・インタビューテスト	・インタビューテスト ・スピーチ等の発表	・ペーパーテスト ・作品（読後の感想や 報告等）	・ペーパーテスト ・作品（エッセー、紹介 文等）

大事なのは、その評価方法が、それぞれの資質・能力を評価するものとして、妥当であるかどうかの検証を行うことです。「話すこと」を評価するためにスピーチ発表を行った際、生徒は覚えた英文をただ読んでいるだけ、といったことはありませんか？ もちろん、自分の言いたいことをまとめて発表するのは大事な活動です。しかし、「話す」という力を適切に測るためにはもう一工夫必要です。例えば、キーワードだけを記載したメモを用意し、それを基に1分間で意見を発表する、といった即興的な話す活動を設定することなども可能でしょう。

<参考資料>

- ①評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（平成23年11月 文部科学省）
http://www.nier.go.jp/kaihatsu/hyouka/chuu/10_chu_gaikokugo.pdf?time=1476356948926
- ②中学校における学習評価に関する参考資料（平成25年7月 大阪府教育委員会）
- ③「英語を使うなにわっ子」育成プログラム（平成25年8月 大阪府教育委員会）
<http://www.pref.osaka.lg.jp/shochugakko/erueigo/>

(2) 指導の改善

把握した結果をもとに、授業における言語活動や使用する教材、評価方法等が、妥当であったかどうか、教科会議等で検討したり、互いに授業参観をしたりするなどして、教員間で共有し、必要に応じて改善することが必要です。

また、CAN-DO リストの設定が、適切であったかどうかを見直すことも大切です。記載されている内容や難易度については、毎年見直すことが望ましいといえます。

(3) 生徒による自己評価

教員による評価だけでなく、CAN-DO リストを生徒の自己評価に活用することも可能です。生徒自身が、「何ができるようになったか」を振り返ることにより、自らの頑張りをほめ、達成感を得ることができます。達成しなかったことについては、何をどのようにすれば達成していたのか、と自身に向き合うことにより、次の学習への動機づけとなります。このように生徒が自律的に学ぶことは、英語力の向上のみならず、すべての学習過程に必要なことです（ただし、生徒の自己評価を教員が行う学習評価の資料として用いることはできないことに留意する必要があります）。

教員が CAN-DO リストを活用して授業を改善・検証すること、生徒が CAN-DO リストを活用して自律的に学び続けることは、今後、一層重要となるでしょう。